

吉野川しまねき探検隊の

調査の意味

シオマネキとハクセンシオマネキ(写真右)は、環境省のレッドリスト(2006)において「絶滅危惧II類(VU)」となっています。

吉野川河口におけるシオマネキとハクセンシオマネキの市民調査から、シオマネキは吉野川河口から14.5 km遡った第十堰までの汽水域のうち、10.5 kmの地点まで生息が確認できました。しかも、その個体群の生息数も安定しており、ハクセンシオマネキと同程度に生息地の空間的広がりをもっていることがわかっています。



シオマネキ(オス)



スズロカモメ(冬羽)



ダイゼン(夏羽)



ハクセンシオマネキ(オス)

わが国においては、ハクセンシオマネキの方が地理的分布は比較的広く、それに比べてシオマネキの分布は限られており、シオマネキの生息地は貴重であるとされています。吉野川では、シオマネキは、私たちが予想していたよりも広い範囲に生息していましたが、河口域にまんべんなく生息しているわけではありません。よく見ると、護岸工事が施されている場所には、シオマネキはほとんど生息しておらず、ヨシ原がよく残っている地域に分布が片寄っている事がわかります。しかもその分布は、干潟でも上部のヨシが生えているゾーンが中心である事がわかりま



ネウロクシギ



ヒロクチカノコ



ハナグモリガイ



ハマグリ



トビハゼ



ヒガタスナホリムシ(体長5ミリ)



イセウキヤガラの花

した。しかし、こういった場所は、埋め立てや、改修工事や、コンクリート護岸などにより破壊されやすいところなのです。シオマネキは、干潟にヨシ原が残り、自然度が高い河口域に見られることから、干潟や河口の自然が良好な状態で保たれているかどうかの環境指標動物になると言われています。

1994年から1996年に広く市民に呼びかけて、吉野川におけるシオマネキの分布調査をおこなった結果をまとめて徳島県立博物館の研究報告に発表しました。シオマネキやハクセンシオマネキが生息する場所のエコトーンの様子を調査し、15年前のデータと比較することによって、ひとりでも多くの子どもたちや市民が、調査を通して環境の変化を実感するとともに、吉野川に対する関心を高めていただきたいと思います。

発行：とくしま自然観察の会
http://www.shiomaneke.net/
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-19-1
Tel/Fax：088-623-6783



ヤマトシジミ



ヨコヤアナジャコ



ムロミスナウミナナフシ(体長7ミリ)



フトヘナタリ



ハタビ(オキアサリ)



クリイロコミミガイ

吉野川 しまねき 探検隊

価値 100円
みなさまのご寄付は、シオマネキ調査など吉野川河口汽水域の保全のためにつかせていただきます。



南岸吉野川橋下



群棲するシオマネキ(住吉干潟・2006年)



チゴガニ



タカノケフサイソガニ(オス)



クシテガニ



ウモレベンケイガニ



ヤマトオサガニ



コメツキガニ



アリアケモドキ



アシハラガニ



オサガニ



シオマネキの子ども(甲幅4ミリ)



北岸吉野川橋下



北岸水割

吉野川河口のエコトーン



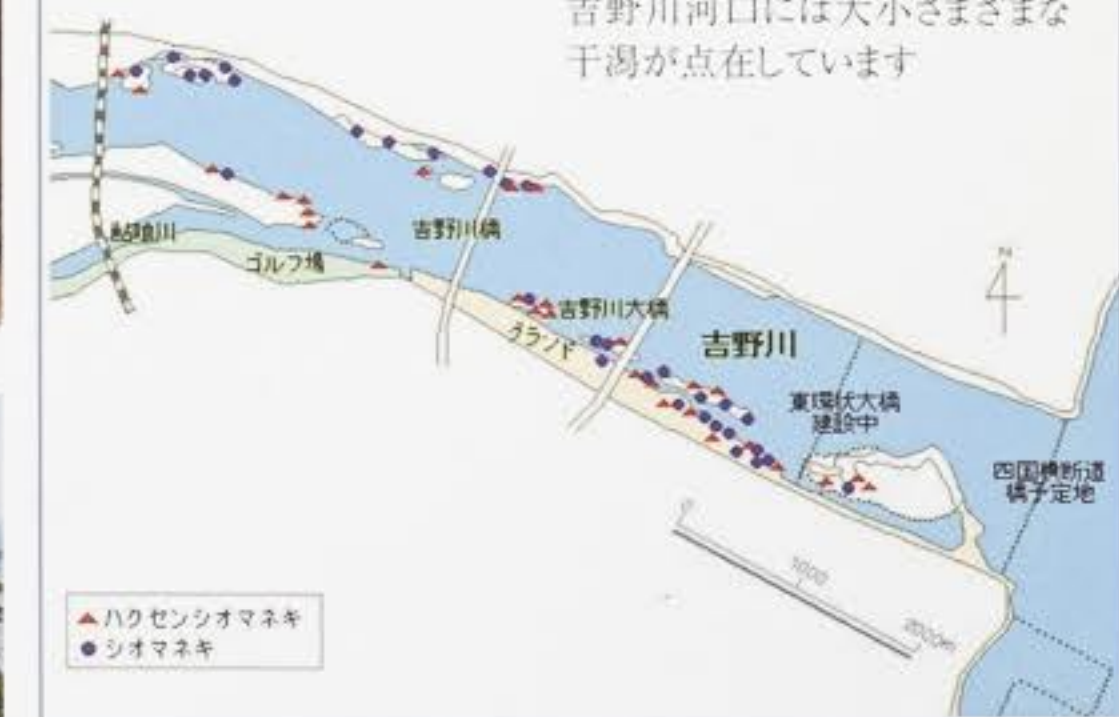
シオマネキが元気に棲める水辺

吉野川河口の汽水域は、多様な生態系が保持されており、豊かな生物相と素晴らしい景観、それを支えてきた環境を背景にして、河口の豊かな水辺は、人々に自然との触れ合いの場を提供しています。さらに、吉野川の河口から第十堰までの14.5kmの間には、いろいろな干潟が点在しています。ヨシ原がある広大な干潟、滞すじ沿いに、ひっそりと奥まっている干潟から、石積み護岸の上に土がたまってできた小さな干潟や、大小さまざまな鳥や砂州など、どれも長い年月をかけて、形を変えながらできあがった吉野川の干潟であり、ここは、日本有数のシオマネキの生息地となっています。

イラスト：猪子知子 生物写真：和田太一

(15年前の吉野川河口におけるシオマネキの分布)

吉野川河口には大小さまざまな干潟が点在しています



このパンフレットは、パタゴニア日本支社の助成金でつくられました。

patagonia